

小児気管支喘息の臨床的研究

施設入院療法の問題点 一入院中の経過について一

国立療養所南福岡病院小児呼吸器科 九州大学小児科 西 間 三 馨

I. 研究目的

施設入院療養は、外国で Peshkin, 本邦で遠城寺がその有効性を唱えて以来、外来治療でコントロールしにくい重症喘息児に広く行われてきた。その効果は明らかであるが、すべての患児に同等の効果を示すわけではない。

また近年、喘息の重症化、多発化、低年齢化がいわれているがこのような変化が、施設入院療養にも当然影響を及ぼしていると考えられる。そこで、最近の施設入院療養を受けた小児の入院中経過を分析し、検討した。

II. 対 象

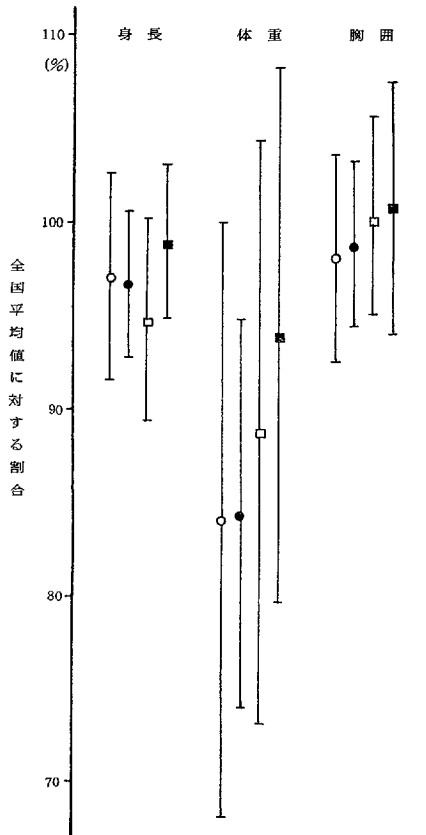


図 1 入院期間及び入院時ステロイド依存性の有無による体位の相異 (入院時)
 (○)ステロイド依存性で入院1年以上
 (●)ステロイド(-)で入院1年以上
 (□)ステロイド依存性で入院1年未満
 (■)ステロイド(-)で入院1年未満

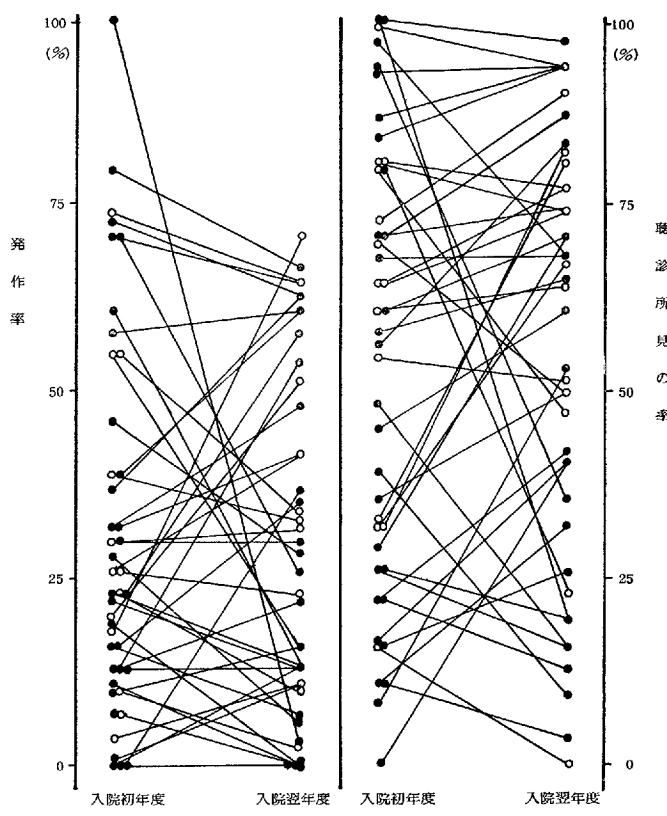


図 2 入院後2ヵ月目と14ヵ月目の各々の1ヵ月間の発作率及び聴診所見の推移 (43症例)
 (●)入院時ステロイド(-)
 (○)入院時ステロイド依存性

表 1 入院中の発作率と聴診率

	n	発作率(%)	聴診率(%)	
入院期間	1年未満	81	19.0±16.6	38.1±22.4
	1年以上	50	33.7±15.0	57.1±19.7
性別	男	81	25.6±16.8	48.0±22.3
	女	50	23.0±18.7	41.1±24.4
入院時ステロイド	(-)	104	22.9±17.8	43.0±23.2
	(+)	27	31.1±15.0	54.1±22.0
重症度	中等症	14	11.2±12.2	25.7±19.5
	重症	117	26.2±17.4	47.7±22.7
全体	131	24.6±17.5	45.3±23.2	

(喘鳴、聴診所見の記載の不十分な4例は除いた)

国立療養所南福岡病院で昭和49年4月～53年8月の間に施設入院療法を受けて退院していった気管支喘息患児、男子84例、女子51例の計135例、年齢3～15才(平均8.5才)である。その重症度は小児アレルギー研究班試案によれば、重症119例(88.1%)、中等症14例(10.4%)、軽症2例(1.5%)である。入院時、steroid dependent は27名(20.0%)であった。

III. 結 果

(1) 入院期間及び再入院率

3ヵ月以下10例、3～6ヵ月24例、6～9ヵ月34例、9～12ヵ月18例、12～18ヵ月22例、18～24ヵ月18例、24ヵ月以上9例の平均342.2日±219.4日である。

再入院は男4名、女8名の計12名(9.8%)で退院より再入院までの期間は24～310日、平均113.0±85.5日であった。前回の入院日数は449.1±267.4日、後の入院日数は166.9±91.9日と短かった。

(2) 体位

入院時の体位を入院期間、入院時 steroid dependent かどうかで4群に分類して検討すると図1のようになり、身長は全国平均値に対する割合で95～99%の間でほとんど差がなく、体重は1年以上入院を要した者は steroid

の有無によらず84%前後と低く、1年未満、steroid(-)の群でも94%と低値であった。胸囲は4群とも98～101%と大きく鳩胸等の胸郭変形、胸郭の過膨張を裏付ける所見であった。退院時はsteroid dependent で入院期間1年未満の群が体重で88.7±15.6%→93.4±11.0%と増加の傾向にあっただけで他は変化が少なかった。

(3) 入院中の発作、聴診所見について

喘鳴及び聴診所見の頻度(以下発作率、聴診率)は表1のようになり、発作率は24.6±17.5%聴診率は45.3±23.2%であり、男女差、入院時 steroid dependent かどうかでは有意差がなく、入院期間1年未満か以上で発作率が前者19.0±16.6%、後者33.7±15.0%、聴診率前者38.1±22.4%、後者57.1±19.7%と差がみられた。

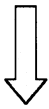
また、入院が長期にわたった者が果してそれが意味があったかどうかを見る一つの試みとして、入院後2ヵ月目と14ヵ月目の各々の1ヵ月間の発作率及び聴診率の推移をみたのが図2であり、全体としては前後で、差がなく、前の有症状率が50%以上の群だけが発作率69.9±13.8%→40.7±25.6%、聴診率79.7±14.6%→69.6±22.2%と差があった。

重症度別では中等症14例の発作率は11.2±12.2%、聴診率25.7±19.5%と全体からみても半分であり良好であった。

IV. ま と め

135例の施設入院療法を受けた喘息患児について入院中の経過を検討し次の結果を得た。

1. 発作重症度では中等症児は経過が良好であり、入院期間が1年以上にわたるものは発作の頻度が高く、入院が長ければより改善するとはいえなかった。
2. 体位は体重が少なく、発作の頻度の高いものほどその傾向が強かった。
3. 再入院の頻度は9.8%で女子に高かった。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究目的

施設入院療法は、外国で Peshkin, 本邦で遠城寺がその有効性を唱えて以来、外来治療でコントロールしにくい重症喘息児に広く行われてきた。その効果は明らかであるが、すべての患児に同等の効果を示すわけではない。